



ニッポンの家

PART 2 誰も知らない潜在力 世界制覇、原理的には可能

海を渡り始めたニッポンの家の主役は、大手が担う「工業化住宅」だけではない。中小企業の間では、和の技法を駆使した“真の日本住宅”を輸出する動きも出始めた。新興国の中間層から先進国の超富裕層まで広大なフロンティアは確実に存在する。

米国のビバリーヒルズに数寄屋造りの別荘が建つ——。そんな時代がやがて来るかもしれない。

米ロサンゼルスに位置する全米屈指の富裕層居住エリア、オレンジ郡。ここでは今、住宅ローン市場崩壊など忘れたかのように、郡全土で100を超える高級住宅街の造成が進められている。

この場所で、日本住宅産業の未来を占う実験が始まった。ニッポンの家を売ろうとする試みだ。ここで言うニッ

ポンの家とは、PART1の主役となったプレハブ工法の住宅ではない。在来工法と木材で大工が匠の技を駆使して造る“真の日本住宅”だ。

世界が待ち望む“和の技法”

仕掛け人は、静岡県沼津市に本社を置く住宅メーカー、平成建設の秋元久雄社長。既に現地で日系企業の進出サポートを手掛ける米ウエストウイング(榊松寿延社長)と組み、2013年から市場調査を開始した。中心都市ニュー

ポートビーチなど4~5エリアで、平均資産5億ドルの超富裕層にアプローチ。早ければ2015年内にも事業化に踏み出す。

「その国や地域の気候や文化に適應しなければ売れない」と言われる住宅。大手も、“和のテイスト”を残しつつ基本的には現地ニーズを最大限に組み入れた“世界戦略住宅”で勝負している。それに対し、平成建設は、ニッポンの家をほぼそのまま売るといふ。

理由は明快で「在来工法と木で大工が造る日本の伝統的高級住宅こそ、今後、世界の人々に受け入れられる条件

市場はある



米カリフォルニア州のオレンジ郡の高級住宅街(左下、右下)。平成建設はここに暮らす超富裕層たちにまず、和室(左)を売り込む



を兼ね備える」(秋元社長)と考えるからだ。

ベニヤ合板ビニール、接着材などを極力使わない伝統的木造住居は、蒸れや腐れがなく長持ちし、シックハウスのリスクも一段と下がる。素材の循環性が高く環境にも優しい。「高気密高断熱でない木造は寒い」と言われるが、そこは素材と設計次第。夏は涼しく冬は暖かい省エネ住宅を造ることも可能だ。適切な施工さえすれば、耐震性も他の工法に劣らない。

「それに何より美しい」と秋元社長は強調する。木の温もり、漆喰の壁、光沢を放つ漆……。年間100万を超える外国人が京都を訪れることから分かるように、我が国の伝統建築への憧れは人類共通の価値観(秋元社長)。

ただ、そんなニッポンの家を海外に売るには、大きな壁がある。コストだ。本当に国内と同じ最高級の品質を再現するには、現地で確保できない木材を日本から持ち込み、腕のある大工や多能工を派遣しなければならない。

そこで、秋元社長は発想を大胆に転換した。「べらぼうな費用かかかるなら、べらぼうな価格でも買ってくれる人に売ればいい」。オレンジ郡を選んだのはこのためだ。

平均世帯年収は全国平均より1万ドル高いと言われる。人口当たりのベッツ保有率が全米一とされるニューポートビーチでは4分の1の世帯が年収20万ドル以上。経営者、芸能人、有名スポーツ選手、高価遺産相続者が数多く暮らし、資産15億ドル以上の超富裕層も少なくない。

平成建設とウエストウイングは、こうした超富裕層向けに、まず「和室」の販売から始める考え。「アートへの造詣が深く、日本を何度も訪れている富裕

最強は伝統的木造住宅!?

世界中に受け入れられる条件、兼ね備える

世界には様々な住居が存在する。

中国の黄土高原ではヤオトンと呼ばれる地下住居に、今も多くの人が暮らす。由来は異民族の襲来から身を守る知恵と伝えられるが、現在でも強烈な黄砂を避け、夏30度以上、冬氷点下という寒暖差に対応するため都合がいい。アフリカのチュニジアには、モグラの巣のように地中に深く広がる家で暮らす部族もいる。ヤオトン同様、寒暖の差を乗り越えるためだ。同様の「穴の家」は砂漠やサバンナ地帯を中心に各地に点在する。

雨の少ない場所や寒冷地では「土の家」が多い。零下70度以下が酷寒の大地で暮らすシベリアのヤクート族は、土と牛糞を塗り固めた壁の家で生活してきた。昼は外気を吸収して涼しく、夜は壁から熱が放出され暖かい。湿度の高い地域で活躍するのが「樹上の家」や「高床式の家」だ。モンゴルのゲルやカンボジアのいかだ式住居など「動く家」もある。



世界の住居形態は多様性に富んでいる。写真はアフリカ・チュニジアの地下住居

その国や地域の気候、風土に合わせ、多様性を極める世界の家。だが、秋元社長が指摘する通り、日本の伝統的木材住宅は確かに、世界の人々に受け入れられる要素を併せ持っている、と言える。

四季折々の環境や頻発する災害に対応することで培われた「快適性」「耐震性」「長寿命」も大きい。が、それ以上に強力なのが、素材の循環性の高さと、健康にいいことだ。本文でも指摘した通り、自然素材が主体の伝統住宅は廃材を大地に返すことができる。また、天然の無垢材を大工が鉋で削り家を建てていた時代にはそもそもシックハウスはここまで問題にはならなかった。

地球規模で環境の悪化に歯止めがかからず、新興国の都市化が進めば、いかなる民族も「環境」と「健康」を最優先に暮らす時代が到来する。日本の伝統的木造住宅最強説は、荒唐無稽ではない(参考文献「世界の民家」川島宙次著)。

層が当面の顧客イメージ。京都の俵屋旅館や神奈川・箱根の強羅花壇が醸し出す“小空間の美”を自宅に再現しませんかとアプローチしていく」と榊松社長は説明する。

“1億円の和室”から別荘へ

和室といっても日本のそれとは違う。「オレンジ郡で建設中の住宅街は1区画500~1000坪。富裕層は200万~2000万ドルの土地に、1000万ドルの住まいを建てる。その10%を和室に充てたととしても、日本の高級住宅1棟分

に匹敵する」(榊松社長)。

手掛けるのは部屋にとどまらない。家具などの設計施工も請け負い、塗り物や陶芸など芸術品の手配も並行する計画だ。景観規制がある地域では敷地内に離れを造ったり、家自体を日本風にはできないが、将来的には城外での別荘建設も視野に入れる。事業が軌道に乗る次第、両社による合併会社の設立などを検討。ゆくゆくは現地で大工や多能工を駐在させていく考えだ。

「欧州のブランド企業はバッグや時計に膨大な付加価値を乗せ、地球の裏

文化の壁は越えられる



快適な衣食住システムは中長期的には世界へ普及していく可能性が高い

側で販売している。同じことは住宅でも可能だと思う」。秋元社長がこう意欲を見せれば「同様の超富裕層居住地はカリフォルニア以外にも、テキサス、東海岸などに点在する」と榎松社長。2人にとって、オレンジ郡はあくまで始まりにすぎない。

ファストファッションのように一定水準の住環境を割安価格で中間層に売るメーカーあり、高級ブランドさながらに超富裕層を攻めるメーカーあり。まだ緒に就いたばかりだが、日本の住宅産業の海外戦略は市場の見極め、技術的裏付けとも理にかなっているよう

に映る。

それでも読者の中にはまだ「説得力を感じられない」という人もいるはずだ。実際、今回取材した専門家からも住宅産業の海外戦略の持続性に懐疑的な声は少なからず上がった。

その理由はほぼ共通している。「人間は、民族の歴史の中で長い時間をかけて最適化してきた居住形態を簡単には変えられない。いかに快適な家も文化の壁は越えられない」だ。

だが、本当にそうなのだろうか。答えは「南海の秘境」にある。

最も文化の壁が高い国

赤道直下にあるニューギニア島の東半分を占めるパプアニューギニア。その内陸部は、地球上で最も近年になって近代文明との接触（ファーストコンタクト）が図られたエリアの一つだ。

首都ポートモレスビーを含む沿岸部のファーストコンタクトは19世紀。が、厳しい自然とマラリアなどの病原菌に内陸に至るルートが阻まれていたこともあり、中央高地、通称ハイランドの主要部は1930年代前半、奥地には50～60年代まで外界と接触がなかった地域もある。

彼らの生活には今も、原始から続く伝統的社会的規範が息づいている。精霊信仰や呪術が日常の中にあり、自給自足の暮らしを送る人も多い。戸籍も住民票もなく、幹線道路は中央高地の主要部と沿岸部を結ぶハイランド・ハイウェイだけだ。

ただ、そんなパプアニューギニアでも近年、生活システムの大きな変化が生じている。2007年にカリブ最大手の携帯通信事業者デジセルが上陸し、携帯電話が普及。若者はジーンズをはき、インスタントラーメンを食べる。都市部では3階以上の「高層住居」も現れた。

「快適な衣食住システムは、文化の壁をも乗り越える」。日本・パプアニューギニア協会会員で、同国に限らず世界の辺境を自らの目で見てきた旅行作家の山口由美氏はこう断言する。

だとすれば、衣食住の中でも、「住」にはとりわけ膨大な未開拓空間がある。「衣」では既にZARA（ザラ）やヘネス・アンド・マウリッツ（H&M）が中国や南半球にまで商圏を拡大し、ファーストリテイリングも「2020年に売上高5兆円」を目標に世界戦略を本格化させている。「食」のグローバル競争も激化しており、海外の日本食レストランの数は2013年3月時点で約5万5000店舗。3年で2万5000店舗も増加した。

それに対し、住のグローバル市場開拓へ向けて本格的な行動を開始している大きな勢力は、今のところ、日本勢以外に見当たらない。

6 日本の本格的伝統住宅の強み

- 1 快適性
夏は涼しく冬は暖かく、様々な気候に対応
- 2 長寿命
蒸れや腐れがなく長持ちする
- 3 耐震性
適切な施工さえすれば他工法に劣らず
- 4 省エネ
素材と設計次第で冷暖房要らずも可能
- 5 循環性
素材の循環性が高く、廃材を大地に戻せる
- 6 健康的
通気性高く、シックハウスのリスクも下がる



技術はある